

ジョージ・マクドナルドの「巨人の心臓」に関する一考察

山田 敦子

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Consideration on “The Giant’s Heart” by George MacDonald

YAMADA Atsuko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

George MacDonald (1824-1905), a British writer of the 19th century, is a forerunner of today's fantasy literature. The main aim of this thesis is to investigate the characteristics of MacDonald's imagination by focusing on "The Giant's Heart." On the surface level, it is a story of a girl who fights against an evil giant. It, however, also describes a battle with inner arrogance, as well as a fight with the evil the British society was experiencing at his time. In "The Giant's Heart," MacDonald created a new story by combining his view of Christianity with folklore and myth.

1.はじめに

イギリスの著述家ジョージ・マクドナルド(George MacDonald 1824~1905)の活躍した19世紀は、ワーズワース、コールリッジの流れをくむイギリス・ロマン主義の盛んな時代であった。この二人の詩人の目的は、〈自然〉の真実と〈想像力〉の色付けとを結合することだった¹。彼らにとっては、詩人が創造行為に全精神を投入するときに〈想像力〉が働くというのが〈想像力〉の本質²であった。また、想像力の仕事は、妄想や虚構——想像上の事物——を生み出すことではなく、「事実から魂を解釈すること」³であった。マクドナルドもそうした潮流の中にあって、独自の想像力論を持っていた。彼は“The Fantastic Imagination”と題するエッセイで次のように述べている。

自然界には自然それ自体の法則があり、それらの法則の使用方法においてと同様に提示の方法においてもだれも干渉してはならない。だが、法則それ自体は他の種類の法則を示唆するこ

とができ、人がそれを望むなら、それ自身の法則を持つ彼独自の小さな世界を作ることができる。というのも、人には新しい形式を作り出す喜び——おそらく、人が創造することに最近接する——喜びがあるからである。そのような新たな形式が古い真理を新しく具体化する場合、我々はそれを想像力の所産と呼ぶ。単なる考案に過ぎない場合は、どれほどすばらしくても、私はそれを空想の所産と呼ぶであろう。いずれの場合にも、法則はたゆまず働いている⁴。

マクドナルドは想像力による創造をこのように考えていた。この見解は、マクドナルドにとっては神学と絡み合うことでもあった。マクドナルドに限らず、ヴィクトリア朝時代は、文学と神学は絡み合っていたのであり、コールリッジに連なる著名な作家たちは、現在われわれが創造的な調停者や神学者と呼ぶところの存在だったのである⁵。

さらに、彼の創作の目的は、『ファンタスティック』で示したように、彼のキリスト教的ヴィジョンと、ドイツ・ロマン派の作家たちのファンタジー作品、

¹ バジル・ウィリー著『十九世紀イギリス思想 コールリッジからマシュー・アーノルドまで』みすず書房、1985年、p.25。

² 同上、p.28。

³ 同上、p.29。

⁴ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, pp. 5-6.

⁵ Stephen Prickett, “A Faith That Feels”, in *Christian History Biography*, issue 86 spring, 2005, p.23.

グリム兄弟やハンス・クリスチャン・アンデルセンの作品に感じたような神話や民話の力とを組み合わせることであった⁶。今日ファンタジーと呼ばれる彼の作品に、神話や民話を材源としたものも多く見出されるのはそのためである。本稿は、マクドナルドの創作の目的がどのように作品に結実したかを、「巨人の心臓」を通して考察するものである。

2. 「巨人の心臓」の素材について

「巨人の心臓」は、1864年に出版された *Adela Cathcart* の中に収められた一編である。物語は、普通人の国のはずれに住んでいた女の子が、弟を探すために巨人の国に入って行き、そこで弟の他に十数人の子どもが巨人に捕らえられているのを発見し、子どもたちを救うために弟と一緒に巨人の心臓を探しに出かけるという冒険物語である。姉弟が探しに出かけた巨人の心臓はどこにあるかと言えば、巨人のいる場所から遠く離れた空裂き山の頂上に置いてあり、めす驚に卵の代わりに抱かせて隠してあるのだという。巨人の心臓を隠したのは巨人自身である。巨人は自分の心臓の隠し場所をときどき変えながら、敵から心臓を守っているのである。

まず、心臓が体の外にあるというモチーフについては、いくつかの民話に材源が見いだせる。例えば、19世紀イギリスで翻訳出版され、人びとの関心を引いた北欧民話の一つ「心臓のない巨人⁷」、19世紀イギリスの人々に大きな影響を与えた『グリム童話』の中の一つ「水晶玉⁸」、古代エジプトの物語「二人の兄弟⁹」、イギリスで語られてきた巨人に関する数々の民話などである¹⁰。

ノルウェーの民話「心臓のない巨人」の筋は、巨人によって石に変えられた兄たちを救うために、末の弟が旅に出る物語である。この民話からはいくつ

かの特徴的な要素が見いだせる。まず、小さい子が大きな巨人を倒すこと。兄弟を救いに出かけること。巨人の居場所や倒し方は、道すがら出会う鳥や動物に親切にした結果教えてもらうことなどである。また、心臓はアヒルが抱いていること。心臓を押すと巨人が泣き叫び巨人はばらばらにこわれてしまうことなどである。

古いエジプトの民話にある「二人の兄弟¹¹」の話では、心臓は傘松の木に掛けてある。心臓を傘松の木にかけたのは、傘松の木の実が色、形、大きさともに人間の心臓に似ていたからであり、弟は自分の心臓を傘松の木に掛けて、遠くにいる兄に自分が無事かどうかを知らせたのである。古代エジプトでは、心臓は靈魂を表していた。

イギリスにおける巨人の民話については、「巨人が人食いの場合があり、十五世紀においてすら人食いの一団がダンディーの近くの丘に住んでいると信じられていた」ほどで、巨人が人食いだという民話はかなり存在しているようである¹²。

これら民話のモチーフをいくつか繋ぎ合わせると、兄弟を助け出す、巨人の心臓は体の外にある、心臓は遠くにある、心臓は鳥が抱いている、心臓のある場所までは親切にした相手が道を教えてくれる、心臓をつねると遠く離れた場所にいる巨人が泣き出す、小さなものが大きな巨人を倒す、という話になり、「巨人の心臓」の話の骨組みは見えてくる。精神ないし〈魂〉は、心臓によって象徴させている。マクドナルドは、これらを下敷きに具体的な肉付けをし、彼の思想を注入して新しい物語を創作したと言えるだろう。

3. 登場人物

<少女>

主人公はトリクシィ (Tricksey) という名の女の子で、彼女は森を国境としたこちら側の現実世界に住んでいる。森のあちら側は非現実の世界であり、そ

⁶ Rolland Hein, "Life and Religion Are One", in *Christian History Biography*, issue 86, spring, 2005, p.19.

⁷ 佐藤俊彦著『北欧民話』未来社、1958年、pp.54-70。

⁸ 小澤俊夫編『語るためのグリム童話⑥』小峰書店、2007年、pp.174-180。

⁹ 同上、pp.143-157。

¹⁰ キャサリン・ブリックス著／石井美樹子他訳『イギリスの妖精 フォークロアと文学』筑摩書房、1991年、pp.93-99。

¹¹ 小澤俊夫編『新装 世界の民話 7 エジプト』ぎょうせい、1999年。

¹² キャサリン・ブリックス著／石井美樹子他訳『イギリスの妖精 フォークロアと文学』筑摩書房、1991年、p.96。

こには巨人が住んでいる。トリクシィには弟がいる。ある日、彼女は弟をいじめる。それが原因で、弟が国境を越えて巨人の国へ逃げていくことからこの物語は始まる。トリクシィは、弟が巨人の国へ行ったのは自分がいじめたことが原因であると気付き、自分の行いを反省して、弟を探しに巨人の国へ出かける。彼女は、巨人は恐ろしいと知ってはいるが、弟を探し出すためには怖がらない。小さい主人公に勇気があるというのは民話の特徴である。だが、この物語では、トリクシィに別の特徴が付与されていることに気づかされる。“Now nobody had ever been unkind to Tricksey-Wee, and therefore she was not afraid of anybody.”¹³”というように、作者は彼女に勇気がある理由を、トリクシィがこれまで人に意地悪されたことがなかったので人を少しもこわがらないのだと説明している。民話では、登場人物の内面をこのように説明することはない。マクドナルドは、この一文で少女に特質を付与することによって、民話を新しい物語形式へと変容させて行ったといえる。

トリクシィは弟をいじめはしたが、すぐに反省して弟を救いに出かける。そればかりか、危険もいとわず真つすぐ前を見つめて大勢の子どもたちをも救い出すために空裂き山へと出かけるのである。トリクシィの素直で勇気に満ちた姿にはさわやかな透明感さえ漂う。この点で、作者は、彼女が純真無垢な少女だという印象を与えることに成功しているといえる。マクドナルドは、わざわざトリクシィに純真無垢という特質を付与したのち、彼女をまっすぐに空裂き山へと向かわせたのであるが、この怖れを知らない純真無垢という少女の内面は欠かすことのできない要素である。なぜなら、純粋無垢な子供は、大人より神に近い存在だと 19 世紀ロマン主義の芸術家たちは捉えていたからであり、マクドナルドも時代の影響をうけ、純粋無垢は高い山の頂にある巨人の心臓と対峙するためには必要な力と認めていたのである。少女がまっすぐに空裂き山を目指すことが出来る理由は、マクドナルドが付与した特質が少女にあるからこそである。

<巨人>

ヒロインの少女が対峙するアンタゴントは、巨人である。イギリスの民話では、巨人は悪いことをする割には間抜けであり、人食いだとも語られている¹⁴。この物語の巨人も子どもを食べる。しかも、幼い子を食べるのが好きなのである。民話では、巨人がなぜ人を食べるか、食べることに對して巨人自身はどう思っているかなどの説明は語らない。しかし、マクドナルドは、巨人の心理状態をこう説明する。

For it was Saturday night, and her husband would wear nothing but white stockings on Sunday. To be sure, he did eat little children, but only every little ones; and if ever it crossed his mind that it was wrong to do so, he always said to himself that he wore whiter stockings on Sunday than any other giant in all Giantland.¹⁵

巨人の夫は、子どもを食べるのは悪いという思いが心をかすめるが、心をかすめたとしても、自分は巨人国中でだれよりも白い靴下を日曜日にはいているからと呟くのである。ここが民話との違いである。従って、この描写にマクドナルドの思想が込められているとみていいだろう。巨人は子どもを食べることが悪いことだと気が付いている。だが、それをはっきり自覚しようとはしていない。それどころか、巨人は白い靴下をだれよりも履いているから、自分は子どもを食べてもいいのだと自己弁護しているのである。筆者は「日曜日に白靴下をはくということは、巨人が日曜の礼拝に出かけることを意味し、しかも、誰よりも白靴下をはいているということは、規則的に日曜礼拝に行くことを意味する」と解釈する。巨人は、だからこそ子どもを食べてもいいのだ、と自分の行いを正当化しているのである。白い靴下へのこだわりは、マクドナルドの言いたいことが透けて見える。白い色に関しては、聖書に次のような

¹³ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, pp.81-82.

¹⁴ キャサリン・ブリックズ著／石井美樹子他訳『イギリスの妖精 フォークロアと文学』筑摩書房、1991年、pp.93-97。

¹⁵ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, p.82.

記述がみられる。

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ。ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。(マタイによる福音書 23 : 27-28) ¹⁶

つまり、巨人は偽善者だと捉えることが出来るのである。また、巨人は、偽善者というだけではない。

“Ha! ha! You don’t know where it is, wife. I moved it a month ago.”

“What a man you are. Thunderthump! You trust any creature alive rather than your own wife.”¹⁷

The giant and giantess went on talking for a long time. The giantess kept advising the giant to hide his heart somewhere in the house; but he seemed afraid of the advantage it would give her over him.¹⁸

巨人の夫は、ひと月前に心臓の隠し場所を変えたが、妻には内緒にしている。妻は夫に、自分が夫の心臓の面倒を見るから心臓を家の中にしようよう忠告するが、夫は妻を信用していない。巨人は自分の身を案じてくれる妻の思いやりを素直に受け止めることができないばかりか、妻を信じることも出来ない。心臓を守ってあげようという妻の思いやりを信

じないのである。何の駆け引きもない愛ある妻の言葉を信じないということは、不信者でもある。偽善者であり不信者でもある巨人は、心の内に深い闇を抱えていることになるのではあるまいか。

ところで、そもそも巨人の心臓はなぜ体の外にあるのか。心臓を体の外に置くということは、ほんとうの自分を知りたくない、直視したくないという自己逃避の表れではないだろうか。自分の心の醜さを自分で見ないでも済むようにするには、心臓をできるだけ遠くに遠ざけておけばいいのである。

I refer anyone who doubts this part of my story to certain chronicles of Giantland preserved among the Celtic nations. It was quite a common thing for a giant to put his heart out to nurse, because he did not like the trouble and responsibility of doing it himself; although I must confess it was dangerous sort of plan to take, especially with such a delicate viscus as the heart.¹⁹

But , dear, Doodlem, it’s fretting care to have a heart of one’s own to look after. The responsibility is too much for me. If it were not for a bite of a radish now and then, I never could hear it.”²⁰

巨人が心臓を遠くにおくことについては、巨人というのは自分で自分の心臓に責任を持ち世話するのをめんどくさがり、どこかに里子に出してしまう習慣を持っている、のだと作者は巨人の心臓について介入している。巨人は、自分の心臓の世話をするぐらい面倒でいやなことはなく、それも耐えきれないほどいやなのである。

巨人が、自分の心臓の世話をするのが面倒だということは、自分の心をきれいにするのが面倒だということに他ならない。自分の心をきれいにするのは簡単なことではない。そのためには、内側の強欲と放縦をかたくなに守ろうとする自我を克服しなければならない。では、なぜ克服しなければならないの

¹⁶ 『聖書』新共同訳、日本聖書協会、2000 年、(新約)p46。

¹⁷ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999. p.84.

¹⁸ *ibid.* p.85.

¹⁹ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, p.85.

²⁰ *loc. cit.*

か。この問題について、マクドナルドは自身の内面との戦いにおいて次のように述べている。

Self, ... You may be my consciousness but you are not my being ... For God is more to me than my consciousness of myself. He is my life ...

Because I have fooled and spoiled you, treated you as if you were indeed my own self, you have dwindled yourself and have lessened me, till I am ashamed of myself ...

Good-bye, Self! I deny you, and will do my best every day to leave you behind.²¹

神の前において、マクドナルドは自我を捨てなければならぬと自覚している。自我を脱ぎ捨てなければ、自分自身が矮小化する。自我を捨て去ることが出来て初めて、自分自身の源に近付くことが出来ると捉えているようだ。

The Day's First Job

With every morn my life afresh must beak
The crust of self, gathered about me fresh.²²

それ故、マクドナルドの朝一番の仕事は、朝ごとに新たにこびりつく自我の殻を砕くことであった。マクドナルドにとって、自我との戦いは大きなテーマであったといえる。この自我との戦いが、つまり、巨人のいう「心臓の世話をする」ことを意味しているのではあるまいか。巨人は、そんなことは面倒だ、と言って自我を脱ぎ捨てるための自己との戦いを拒んでいるのである。自我を明け渡すことを拒んでいるどころか事態は逆で、自我を大事に守るために驚きに心臓を抱かせているのである。

<ひばり>

トリクシィと弟ボブ (Buffy-Bob) は、心臓を探し

²¹ C. S. Lewis, *George MacDonald: An Anthology 365 readings*, HarperSanFrancisco, 1973, pp.82-83.

²² *ibid.* p.158.

に行く道すがら鳥に出会い、鳥の歌を聞く。二人は、ふくろう、ナイチンゲール、ひばりなどに会うが、三番目に出会ったひばりの夫の歌には特に注目する必要がある。空高く舞い上がることのできる夫ひばりは、“Poor little things! You can't fly,²³”と、空を飛ぶことのできないトリクシィに対して小さ優越感に浸っている。それに対してトリクシィは“No; but we can look up,²⁴”と、自分にもできることがあると答える。更に、ひばりの夫は、“Oh you don't know what it is to see the very first of the sun.²⁵”と追い打ちをかけて言う。それに対して、トリクシィは”But we know what it is to wait till he comes.²⁶”といい、自分には待つことができるのだからと、ひばりの夫の言葉に動じることはない。

ひばりの夫は自分が高く飛べることを自慢げに話すが、高く飛ぶことのできない少女への思いやりは示さない。それについて、マクドナルドは自分のメッセージをトリクシィに喋らせている。だれよりも高く跳べなくてもいい。上を見ることはできるのだから。だれよりも早く行かなくてもいい。会えるまでまてばいいのだと。そこで、トリクシィはひばりの夫の心を以下のように歌っている。

“Shine on me, my lord; I only am come,
Of all your servants, to welcome you home.
I have flown a whole hour, right up, I swear,
To catch the first shine of your golden hair!”²⁷

ひばりは、陛下の顔が見たくて、朝早くからやってきたのは自分だけであるとアピールし、だからこそ陛下の御光がほしいのだと自分の希望を述べる。だれよりも早くやって来たことを自慢しているのである。それに対して、太陽陛下は答えて言う。

‘Must I thank you, then,’ said the king, ‘Sir Lark,

²³ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, p.90.

²⁴ *loc. cit.*

²⁵ *loc. cit.*

²⁶ *loc. cit.*

²⁷ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999, p.91.

For flying so high, and hating the dark?
You ask for full cup for half a thirst:
Half is love of me, and half love to e first.²⁸

陛下はひばりの夫の強欲をたしなめている。自分一人だけ空高く舞い上がり得意になっているひばりの夫は、自己顕示欲が強いだけで妻への配慮も見せない。これは、巨人の夫と同じではないだろうか。二人とも自分自身を王だと自負している。王だと言いながら妻への配慮も幼い子への配慮も見せない。強欲に自我を主張するだけである。マクドナルドが、一日の最初の仕事としている「自我の殻を砕く」ことから、対極にある心の状態だと言っている。ひばりの妻に、御光が届いていることを歌って聞かせたのはトリクシである。ここでも、素直なトリクシと傲慢な夫ひばりの違いが浮き彫りにされている。

4. 自我／善悪との闘争

物語には、少女、巨人、ひばりを通して、無垢なものと自我の強いものとを対比させて、自我に拘泥していたら先に道は開けないのだということ、自我の解放こそ自身の根源に近づくことの出来る道であるというマクドナルドのメッセージが織り込まれている。だが、実際は、マクドナルドを強く突き動かす具体的な何かがあって物語は生まれたのではあるまいか。マクドナルドを深部から突き動かしていたものとは何であろうか。

“I will leave it a month longer where it is, and then I will give it to the Queen of the Kangaroos, and she will carry it in her pouch for me. It is best to change its place, you know, lest my enemies should scent it out. But dear, Doordlem, it’s a fretting care to have a heart of one’s own to look after. The responsibility is too much for me.”²⁹

ここに敵という言葉が一回だけ出てくる。しかし、

巨人は、自分の敵が誰であるかは語っていない。敵は、物語の最後まで目に見える具象化した形としては一度も登場しない。では、敵とはいったい誰なのか。巨人は何から心臓を守ろうとしているのか。いままで見てきた通り巨人の心の状態は闇である。それは巨人自身が生み出したものである。巨人の妻の愛や思いやりを受け入れることが出来ない心。小さな子どもを生で食べる残忍さ。それでも自分は正しいと主張する傲慢さ。それらはすべて巨人自身の内部に巣くうものである。ひばりの夫は、闇を嫌って高くまで上がってきたが、闇を作り出しているのは、飛べないトリクシや思いやり深いひばりの妻に思いやりを示さないひばりの夫自身の傲慢さにある。悪は自分の内部から生まれ自分の内部に巣くうものである。心臓が魂の象徴だとすると、巨人は自分の魂を魂の生まれいずるところの神に明け渡しているのではない。巨人がいかに心臓の隠し場所を変えながら心臓を守ろうとも、自分の内部に生まれる闇に支配されている限り、いつかは自分自身が滅びることになるであろう。

姉弟に見つけ出された巨人の心臓は、弟が運んできた、蜘蛛の液一滴でたちまち小さなものにしぼんでしまう。くもの液はひばりの夫の言うところの陛下からもたらされた液といえる。なぜなら、ひばりの妻に、高い所に飛べなくてもあなたにも御光はあまりますよと歌って聞かせたのはトリクシであり、それをトリクシに歌わせたのは、他ならぬ陛下ではないかと考えられるからである。陛下の愛の歌をトリクシが代わって歌ったのである。歌のお返しにひばりの妻は、驚のいる場所を教え、そこへ行くには蜘蛛の網をのぼって行くといいと教えたのである。また、トリクシは一匹のくもが池の中に落ちたのを助けたことにより、蜘蛛に導かれて上にのぼることになる。蜘蛛からもらった蜘蛛の液は巨人にとっては猛毒である。蜘蛛は言う。有害なものは食べるが無害なものは食べないと。つまり、蜘蛛の液は、陛下から受けた愛の連鎖によってもたらされたものであるから、陛下の愛に他ならないのである。愛を拒否した巨人の心臓は、蜘蛛の液一滴で小さく縮み、小さな子のひとひねりで悲鳴を上げ、苦しみのうちまわるのである。

²⁸ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999. p.91.

²⁹ *ibid.* p.85.

巨人が強欲な自我を解放し、強欲な自我と手を切らない限り救われることはない。蜘蛛の液から救われるには、自分の醜さを自覚し、偽善と手を切る他ないのである。だが、最後の断末魔に及んでもまだ姉弟をだまそうとする。ついには、トリクシィと弟に対して、巨人は怒りと復讐の叫び声をあげて、二人に襲いかかる。弟の一足早い動きによって、巨人の心臓にナイフが刺さり、巨人は息絶えた。神に近い存在とされている、無垢なるものの手によって、巨人は息絶えたのだ。

5.表層の物語／内面の物語

「巨人と心臓」は、表層の物語は、主人公の少女が、巨人の心臓を見つけに出かけ、巨人の悪い心を退治し、幼い子どもたちを巨人から救い出すという外的闘争の冒険物語である。舞台は森である。少女のすんでいる家は森の外側にあり、巨人が住んでいる場所は森の中側にある。森の外側は明るさを、森の中は暗さをイメージしている。また、少女が巨人の心臓を目差して上るところは空裂き山の頂であり、巨人がいるところは家の中である。頂は明るく、家の中は暗い。トリクシィが戦う場は、明るさと暗さの対立をイメージしやすい場にある。

明暗の対立は、当時の社会を反映しているともいえる。即ち、高度な物質文明と機械文明を享受する上流階級や中産階級の富める者と、貧しさにあえぐ工場労働者との対立である。豊かな教育を受ける富める者の子供たちと、教育も受けられず社会の片隅に取り残される貧しい子供たちとの対立でもある。19世紀は児童向け書物が華やかさをました時期である。色とりどりの書物を手にできるようになった子供たちと、雇い主に虐待され、その日の食べものにあるつくのさえ困難な文字の読めない子供たちとの対立。夜、電光の下で絵本を楽しむ子供たちと、貧しさの吹きだまりのような路地の暗闇で、寒さに凍えながら野宿する子供たちの対立である。トリクシィが対峙した相手は森のはずれに棲む巨人であったが、虐待される子供たちにとっての巨人は、社会の中央に位置する大人たちであり、社会組織そのものであった。子供たちが対峙するには巨大すぎるほど巨大な巨人であった。

マクドナルドは、巨人に立ち向かう子供の代表としてトリクシィを置いた。純真無垢で、明るく生き生きとしていて、思いやりやがあり、理解力に優れ、不屈だけれど我は強くない魂の持主である少女トリクシィは、まさにロマン派の芸術家たちが理想とする子供像であった。

不愉快な姿で発展を続ける社会への芸術家の不満のシンボルとして、子供をおいたのである。実用的な価値あるものと「機械」にますます取りつかれていった世界にあって、子供は「想像力」と「感受性」のシンボル、ひろく社会全体にみなぎってはげしく人間性を蝕んでいく力に対抗する「自然」のシンボルとなることが出来た。芸術家は人間の「無垢」な魂と、つのっていく社会の経験の重圧との葛藤を意識して、それを子どもを通して表現することが出来た。

30

子供が彼らにとっては主体的な「自己」探求に最高の意味を持つシンボルとなり、また、社会の「経験」に対するロマン主義的抵抗の表現となったのである。³¹

このように、ロマン派の人々にとって、子供は抵抗のシンボルであったのである。マクドナルドもその時流に乗ったと言えよう。

物語は、表層では、巨人との戦いであったが、内的闘争では、巨人の心臓に象徴されるように、内なる自我との戦いの物語である。巨人の好物は、幼い子どもである。子供を鍋に放り込む描写、煮るより生で食べる方が好きだという描写には、巨人の際限のない欲望が生々しくリアルに描き出されている。自我に翻弄される巨人の心は暗い闇の中にある。また、人間を食べることに代表されるように、〈巨人〉には悪のもついかかわしさが漂っている。心の闇は悪の象徴であり、自我との戦いとはつまるところ悪

³⁰ ピーター・カヴェー著／高田賢一他訳『子どものイメージ 文学における「無垢」の変遷』紀伊国屋書店、1979年、p.26。

³¹ 同上、p.27。

との戦いに他ならない。

19世紀、繁栄の真ただ中にあったイギリスは、産業が拡大していく半面、貧しい労働者を多く輩出した。貧しい労働者の子供の多くは路上に投げ出された。当時の紳士たちの中には慈善活動で貧しい子どもたちに手を差し伸べるものもいたが、一方では貧しい少女たちを相手に買春を行う者もいた。紳士たちの昼の顔と夜の顔の違いは、巨人の抱える心の闇と何ら変わりはないといえる。マクドナルドは、紳士たちの欺瞞を「巨人の好物は小さな子供を生きたままでも食べること」だという一文に込めたと読み取ることもできる。紳士たちは欺瞞に満ちた内なる闇を抱えながら、巨人同様にそれに気づこうとはしなかったのではなかろうか。表層の物語で、悪との闘争の場は高い頂を目指して上へ上へと向かうが、内面の物語では、心の闇の奥へと奥へと闘争の場は向かう。それ故に、自分の抱える闇に自らが気づこうとしなければ、悪に支配されていることは自覚できないのである。

毎朝、自我との戦いを意識していたマクドナルドは、自分の思想を、「巨人の心臓」を通じて物語ることによって、人びとに自覚を促したのかもしれない。物語の最後で巨人は滅びるが、悪に自我が支配されていたがゆえに、滅びがやってきたのである。ロンドンのような、イギリスの都市が抱える闇は、イギリスという自我が肥大化した結果であろう。マクドナルドは、イギリスの抱える危機を、〈巨人の心臓〉を通して物語りたかったのではないだろうか。自我が肥大すれば破滅がくるということを、巨人の心臓で具象化して見せてくれたのであろう。

6. マクドナルドの創意工夫

マクドナルドの目的は、民話と自らのキリスト教的ヴィジョンを融合することであったが、民話を材源とした強みはいくつも見出せる。主人公の少女に対立するものとして〈巨人〉を置いたことは、〈巨人〉一語で物語が悪との戦いであることをストレートに意識させるのに効果的である。物語の対立構図が分かりやすく、具体的説明を必要としないということは、物語のテンポに効果を発揮する。更に、悪との戦いという重いテーマでありながら、物語が軽妙に

進んでいくのは、戦う相手に〈巨人〉を置いた効果でもある。民話における〈巨人〉は、人間に悪さをする敵であるが、半面、頭は弱く間抜けさを連想させる。その間抜けさが、読者の恐怖を和らげ、興味を呼び起こすのではないだろうか。

森という舞台設定もまた効果的である。森は、その向こうに何があるのだろう、と人びとの想像力を刺激し、ワクワクさせる反面、奥の方は暗くて見えないだけに不安も呼び起こす。わくわく感と不安感、読者の気持ちをつかむのに効果的である。

マクドナルドの工夫で、非現実と現実世界の国境に森を設定したことで、世界を重層的に表現することに成功している。現実の世界と非現実の世界は森と地続きにあり、しかも木々の枝は、現実世界と非現実の世界の両方に伸びている。これは、国境を曖昧にし、両方がまじりあった領域があることを想像させる。これによって、主人公は国境を超えていくこともできるが、戻ることもできるのである。完全に森の奥に入ってしまう手前の領域で物語が展開するからこそ、我々読者は作家の創造した非現実の世界を想像できるのである。

また、森を国境にし、現実と非現実の世界を地続きにしたことにより、現実にかかる問題や時間や場所を、民話の中に織り込むことが容易になる。それにより、民話に作者は自らの思想や時代を反映させながら、新しい形式の物語を創出できるのである。

この物語は土曜日から日曜日にかけての一晚の出来事であるが、巨人の心臓を倒すまでの現実的時間と内的な体験時間には大きな時間的差があるのを実感する。物語の中にその違いを感じさせるのが、マクドナルドの想像力による筆力というものであるが、マクドナルドが自由に想像力を駆使できたのも、民話を素材にしていたからであろう。民話は、主人公が子どもであること。小さいけれど勇気があること。小さなものに大きなものが倒されること。三回の反復が用いられていること。ユーモアがあることなどに特徴がある。三回の反復は民話においては問題解決への道筋になっている。この物語においてもそれはいえる。空裂き山への道を尋ねる場面で、ふくろう、ナイチンゲールと聞いて行っただが、誰も教えてはくれなかった。三番目のひばりに出会うことによ

って、初めて行き方が分かったのである。姉弟と巨人は、心臓をめぐる最後の攻防を繰り返す。トリクシィが巨人に、行いをちゃんとあらためるかと思えば、巨人はすすり泣いたり泣き叫んだりして行いを良くすると約束するが一向に改まらない。攻防はユーモラスに描き出される。結局、最後に巨人が息絶えて物語は終わる。このように昔話の特質を備えることにより、物語の骨組みは大きくずれることなく、間違いなく終結へと向かったのである。

この物語で一つ問題点を挙げるとすれば次の記述であろう。

At length they reached all but the very summit, where they stopped. Tricksey-Wee and Buffy –Bob could see above them a great globe of feathers, that finished off the mountain like an ornamental knob³².

山の頂に着いたとき、トリクシィとボブは羽でできた大きな球を頭上に見たのであるが、これは表現された意味以外に別の意味を読み取ることができるだろう。彼らは球を山の頂の上に見たのではなく、彼らの頭上に見たのである。空中に見たのである。これは、即ち、マクドナルドの他の作品にも見られることであるが、聖霊を表現しようとしたのではないと思われる。トリクシィは弟と喧嘩をしたけれど、愛を持って弟を救いに行き、そして捕われた子供たちを助けるために勇気を持ってこの頂までやってきたのである。こうした行為の結果、神に近づくことができ、彼女の頭上に聖霊の象徴として「羽でできた大きな球」が顕れたと解釈することができるのではないだろうか。トリクシィは、ひばりの夫の言葉に対して「ええ、でも上を見ることはできます」「会えるまで待つことの素晴らしさは知っています」と答えたが、作者はこの場面でその答えを出したのではないだろうか。この場面に三位一体が成就したことが読み取れるのではないだろうか。つまり、マクドナルドが一番言いたかったことは、この場面では

なかったかと推察されるのである。

これは、マクドナルドの創作の目的がキリスト教的ヴィジョンを伝えることにあったのであるから当然の帰結と言える。だが、物語の完成度という点から見れば、それ故に問題を含んでいると考えることもできる。つまり、この数行がなくても、蜘蛛の糸で編んだ階段状の網を登る場面では、高みが増すに従ってマクドナルドの筆致は冴えていき、場面の臨場感は十分に描写されている。聖霊というのは、キリスト教において神との三位一体を示すものである。読者には様々な思想の者がおり、信仰に対する思いもさまざまであろう。物語はより広く受け入れられるものの方が普遍性は高まり、より洗練されたものと位置づけることができるのではないだろうか。その点で、この箇所があることによって感銘を受ける者もいれば、好ましくない反応を示す者も出てくるであろう。民話がなぜ地域を超え時代を超えて広く世界中から受け入れられているかといえば、思想、時代、場所を特定しないからであり、普遍的という点では完成度が高いからであろう。だが、マクドナルドは、その民話に自らの思想を織り込もうとしたのであり、この点がマクドナルドの作品におけるジレンマと見ることはできないだろうか。

7. 物語の継承

〈巨人〉は、北欧神話やケルトの神話に登場する〈巨人〉のように、もともと人間が自然界と向き合った時感じたものを具象化したものである。自然は時には荒々しく荒れ狂い、人びとの恐怖の対象となる。それが〈巨人〉であった。

太古から人々が抱いたイメージを具象化した〈巨人〉を用いて、マクドナルドが新しい形式の物語の創造を試みたことは、〈巨人〉は時を超えて普遍的なイメージを内包しつつ、新たな形式で語り継ぐことができることを証左したと言える。人は、自分は何と繋がっているのか、ここにいる意味は何なのか、どう生きたらいいのか、未来はあるのかななどを語らずにはおれないのではないのか。マクドナルドは、それらについての自らの思想を、民話のもつ普遍的イメージを借用しつつ、娯楽性を交えながら物語ったのであろう。逃れようのない社会的苦しみの中にあ

³² George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999. p.95.

る子供達には救いによる未来があることを、欺瞞に満ちた大人たちには傲慢の先には破滅があることを、非現実の世界を通して語りかけたのであるまいか。

マクドナルドの試みは、民話熱の高まっていた 19 世紀だからできたことかも知れない。マクドナルドは、民話は寓話ではないと捉え、彼の作品に対して “It may be better that you should read your meaning into it. That may be a higher operation of your intellect than the mere reading of mine out of it: your meaning may be superior to mine.”³³” と言って、読者がさまざまに読み取ることを奨励している。C. S. ルイスは、”What he does best is fantasy---fantasy that hovers between the allegorical and the mythopoeic. And this, in my opinion, he does better than any man.”³⁴” と述べているが、マクドナルドは、シンボリズムを多用した物語を編むことで、C. S. ルイスのいう、アレゴリーとも神話ともつかないファンタジーを紡いだのであろう。民話は真実を簡素化して伝えているがゆえに、人びとの心を捉えて離さないが、マクドナルドは、民話の魅力に加えて、時代性や思想を織り込むことに成功したといえるであろう。19 世紀と比較したら、現代は、オリジナルな民話を採集することさえ困難時代である。しかし、人々は、機械文明に取り囲まれた現代でも、遠い太古と繋がりがああることを感じるとき、心に安らぎを覚えるのではないだろうか。

太古には太古の巨人、19 世紀には 19 世紀の巨人がいたように、現代には現代の巨人がいるであろう。太古のイメージは、時を超え、所を超えて、これからも新たな表現形式へと変容しながら、語り継がれていくことであろう。

8. おわりに

マクドナルドは思想上の理由から、キリスト教的ヴィジョンを語る場を説教台から文字による世界へと変更せざるを得なかった。彼が関心を寄せた神話・民話は、それらが内包する根源的力において、

彼の思想を融合させる素材として目的に適ったものであった。「巨人の心臓」においては、民話を軸に、そこへ彼自身の心の闇がもたらす悪との闘争、そして現実的な社会悪との闘争を織り込むことによって、新しい物語形式を創出したといえる。それ故、新しい表現形式は、心の内に展開する非現実の世界と、現実世界に展開する緒問題との両面を内包する形式となったのである。そこに彼独自の工夫が見て取れる。彼の、語らずにはおれなかった已むに已まれぬ思いが新しい物語を創出させたといえるだろう。19 世紀という大きな社会変革の時代であったからこそ生まれた形式だと言えるかもしれない。それはまた、〈巨人〉というモチーフを通して太古から現在まで物語が継承されていることの証左ともなったのである。

【テキスト】

George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999.

【引用文献】

Christian History Biography, issue 86 spring, 2005.

C. S. Lewis, *George MacDonald: An Anthology-365 Readings*, HerperCollins, 1973.

C.S.ルイス著／中村妙子訳『燃やしつくす火』新教出版社、1983 年。

ジョージ・マクドナルド著／吉田新一訳『黄金の鍵』筑摩書房、1993 年。

バジル・ウィリー著『十九世紀イギリス思想 コールリジからマッシュュー・アーノルドまで』みすず書房、1985 年。

ピーター・カヴェー著／高田賢一他訳『子どものイメージ 文学における「無垢」の変遷』紀伊国屋書店、1979 年。

『聖書』新共同訳、日本聖書協会、2000 年。

【参考文献】

U.T.J.アークル著／松村昌家他訳『イギリスの社会と文化 200 年の歩み』英宝社、2002 年。

小澤俊夫編『新装 世界の民話 7 エジプト』ぎょうせい、1999 年。

³³ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, 1999. p.7.

³⁴ C.S.Lewis, *George MacDonald An Anthology-365 Readings*, HerperCollins, 1973, p.xxix.

小澤俊夫編『語るためのグリム童話 6』小峰書店、
2007 年。

佐藤俊彦著『北欧民話』未来社、1958 年。

高橋康也著『ヴィクトリア朝のアリスたち』新書館、
2003 年。

(Received: September 30, 2009)

(Issued in internet Edition: November 1, 2009)